

作文隨全



特34

132

077618-000-2

特34-132

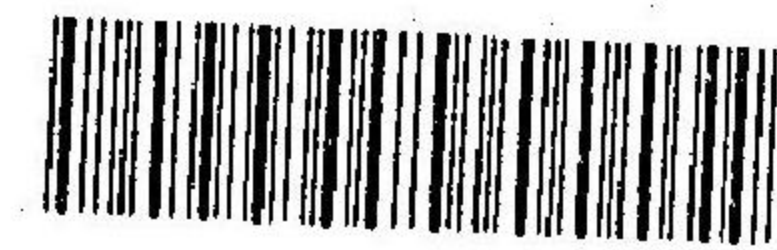
作文隨

新城 新

新谷 英太郎 / 編

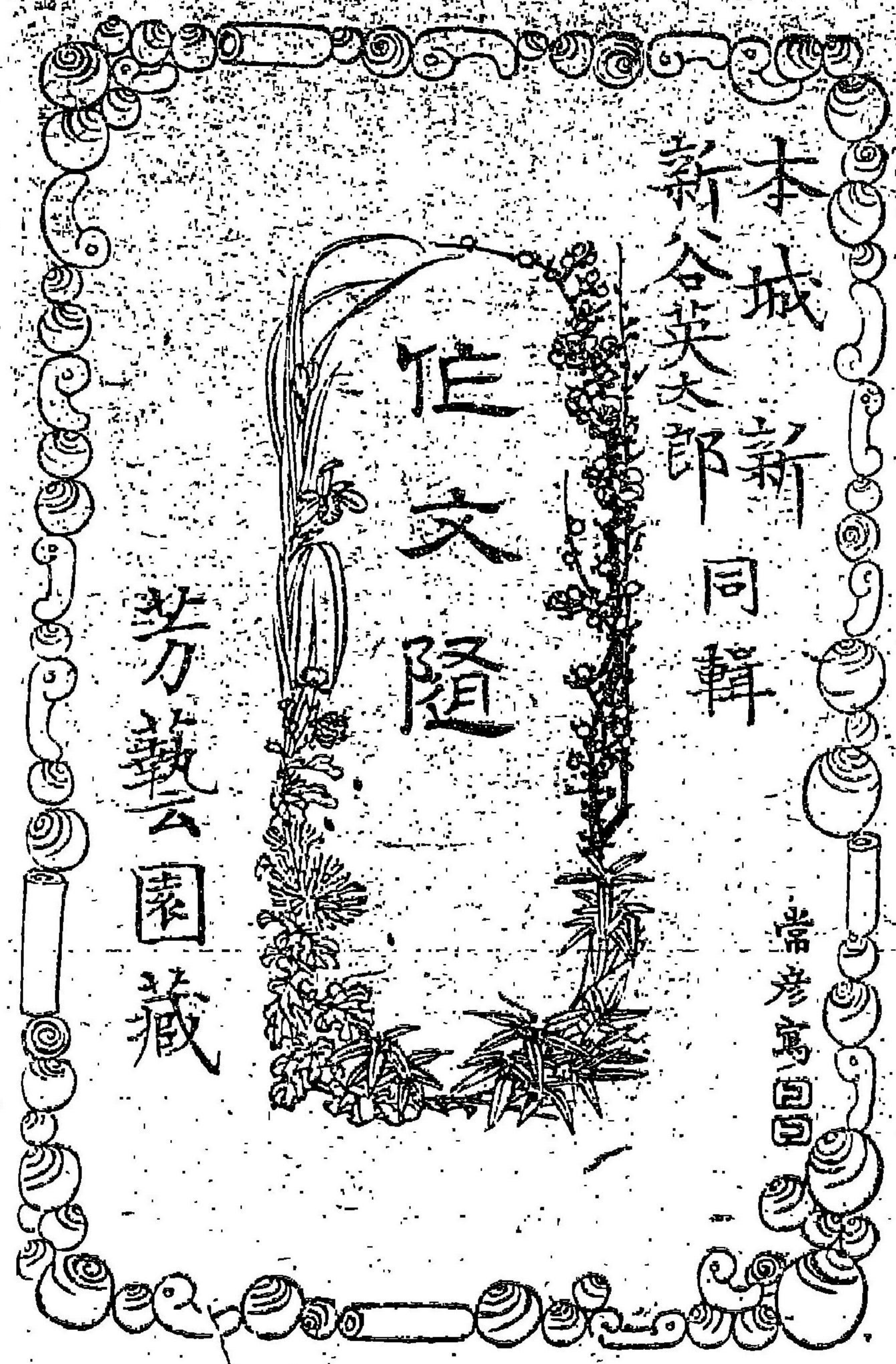
M21.12

DAC-0983



凡例

- 一此書初學文ヲ作ルニ訓ヲ同ノシテ意義ヲ異ニスルモノヲ混同シテ用ヒ其意ヲ解スル事難ハサルヨリ尙ニ文章ヲ爲サ、ルノ憾有レハ此ヲ辨別スルモノナリ
- 一凡例意義ノ一例ヲ舉レハ草木ニ咲ク花ニ華ノ字ヲ書シ物品ヲ贈ニ送ノ字ヲ以テスルノ類也
- 一此書ハ初學ノ爲ニスルモノナレハ勉メテ近遠ナル字ハ省キ日用ニ切近ナル字ヲ採革セリ故ニ同訓ナルモ省キタルモ多シ
- 一熟字ヲ附シ便ト爲ス字ニ由リ熟字ニ之シク且之カ爲メ反テ惑ヲ生スルカ如キノ慮アルハ多クハ省ケリ
- 一俗字ニノ雅文ニ用無ク或ハ二字接續ノ義ヲ爲スモノヲモ之ヲ載ス之レ實際却テ使用ニノ間キ難ケレハ也
- 一編中日用切近ナル文字モ漏脱ノ憾無キ能ハス是等ハ續テ後篇ヲ出シ補正スルノ意也



凡例

一此書初學文ヲ作ルニ訓ヲ同フシテ意義ヲ異ニスルモノヲ混同シテ  
 用ヒ其意ヲ解スル事能ハサルヨリ竟ニ文章ヲ爲サ、ルノ憾有レハ  
 之ヲ辨別スルモノナリ

一同訓意義ノ二同ヲ舉レハ草木ニ咲ク花ニ華ノ字ヲ書シ物品ヲ贈ニ  
 送ルノ字ヲ書スルノ類也

一熟字ヲ附シ便ト爲ス字ニ由リ熟字ニ之シク且之カ爲メ反テ惑ヲ生  
 スルカ如キノ慮アルハ多クハ省ケリ

一俗字ニノ雅文ニ用無ク或ハ二字接続ノ幾ヲ爲スモノヲモ之ヲ載ス  
 之レ實際却テ使用ニノ閑キ難ケレハ也

一編中日用切近ナル文字モ漏脱ノ憾無キ能ハス是等ハ續テ後篇ヲ出  
 シ補正スルノ意也



一初學訓ノ異同辨解ニ拘泥シ文字ノ適用ニ苦ム事モ有レハ幾ニ大左  
 無キモノハ同意トノ解ヲ爲サス是其惑アラシキ事ヲ懼テ也  
 一編次同訓ノ中近ク用ユル字ヲ初二出シ又往々解ヲ附セサルモノ有  
 ルハ意味平易ニシ殊更ニ辨ヲ要セサレハナリ  
 一此編訓ノ異同ヲ辨スルヲ以テ主トスレハ假名ノ用法ニ拘ハラスイ  
 申サオノ如キ異ナルモ之ヲ辨別セサルハ其便ニ隨フノミ

作文法序

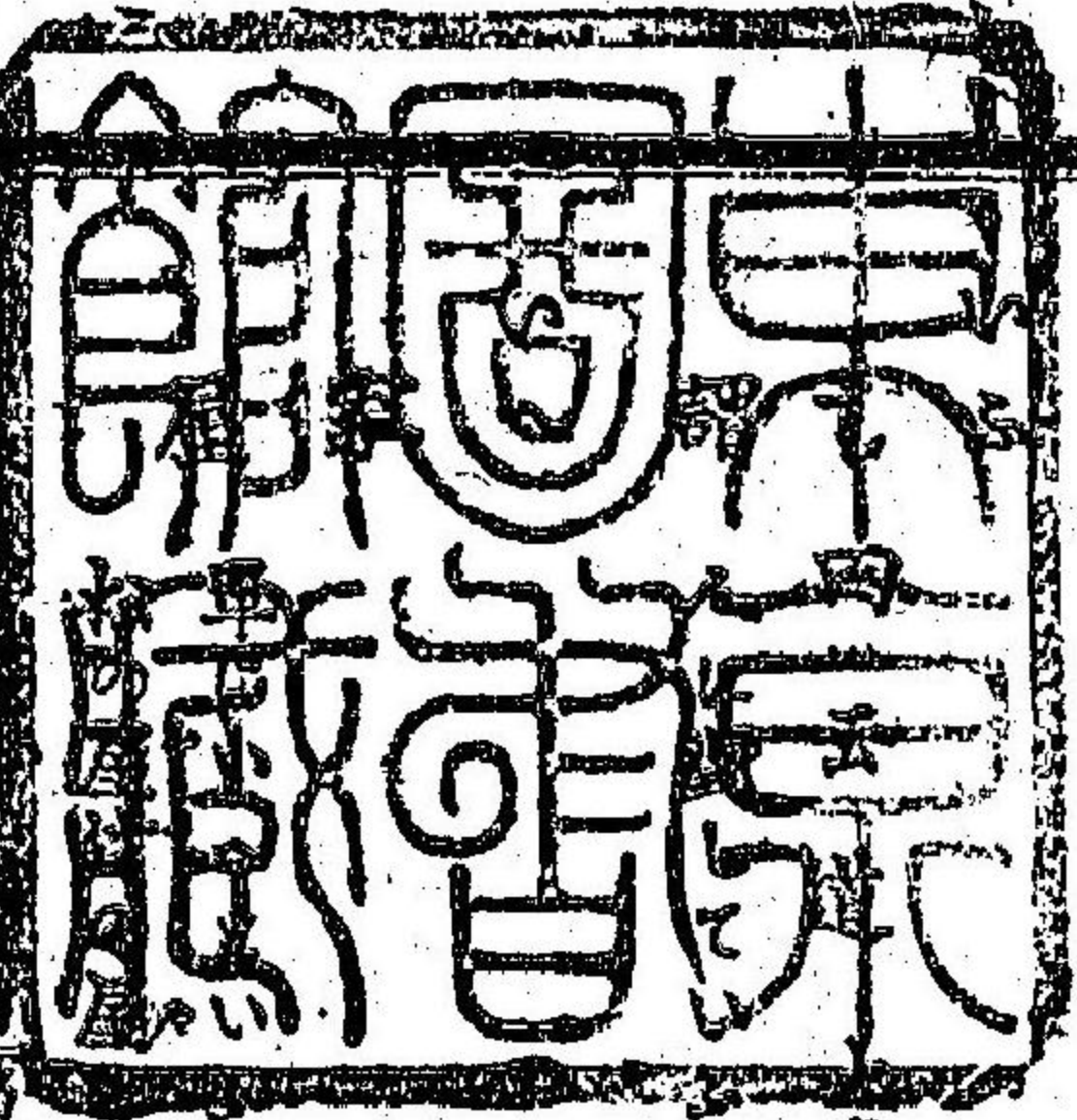
漢字の言葉は多かりしやうか、さうか、あつたのやうか、  
 まこと義の系、あつたこと、まゝ、難、云、難、又、難、は  
 漢字の文字の教養は、僅かありしやうか、柳、字、の  
 原、通、り、起、り、し、の、ま、た、柳、字、の、ま、た、  
 通、り、せ、り、し、の、ま、た、柳、字、の、ま、た、  
 せ、り、義、を、な、し、て、成、る、と、し、の、ま、た、柳、字、の、ま、た、  
 教、養、の、ま、た、柳、字、の、ま、た、柳、字、の、ま、た、  
 山、水、を、水、の、ま、た、柳、字、の、ま、た、柳、字、の、ま、た、  
 あり、木、を、木、の、ま、た、柳、字、の、ま、た、柳、字、の、ま、た、  
 思、ひ、の、ま、た、柳、字、の、ま、た、柳、字、の、ま、た、  
 あり、を、な、し、て、成、る、と、し、の、ま、た、柳、字、の、ま、た、  
 あり、を、な、し、て、成、る、と、し、の、ま、た、柳、字、の、ま、た、

何れも何れも... 花と華と... 舟... 海老... 月... 舟...

作文 隨

本城 新 同轉  
 寄谷 典太郎

○この部



厦 大なまいへなり  
 池 同し  
 犬 同し

意同し  
 時に用ゆ  
 時には用ゆる事多なり  
 いふ如きに用ゆ  
 樹屋 接屋  
 雷潤屋 露潤屋身

納 いれたまひる事  
 出納 収納 ○納れて出る事は災を招く  
 引納 納納 の門

容 いれて好む意  
 容納 ○容納れらる  
 ○海はよく水を容め

入 出るの反語

茨 刺める草の名又風の草  
 茅茨 茅茨 織茨

荊 棘 ともに刺める草の名  
 棘荊 柴荊 田荊  
 枳棘 芭棘 蒺棘 鈎棘

後 棹 同し

槳 又棹に作る小舟也

軍 軍陣 軍人 將軍 國軍  
 軍勢 孤軍

師

意同し  
但玉之師愛國之師といふは如き意に用  
る事多し  
帝師 玉師 班師

いのる

祈禱 同し

いかる

怒 愠 大なる列なし怒は甚しきい  
り  
懣怒 震怒 按劍怒  
怒志 憤志 結志

曠

又怒の意  
天曠 龍曠 貪曠

いさる

生

活 いきもの又いやすといふ意又いきく  
して居るがたち  
活潑 活計 偷活  
活入 活路  
又活々は水の聲なり

いづく

懐 胸に持ちて居る事則ちふところにする  
の意

抱

懷怒 ○君子は玉を懷て顧らばさか  
懐剣  
負抱 乳抱 ○抱た兒は負た兒より愛深し  
保抱

いこふ

休息 同し

休憩 休暇 日休 逸休 乞休 罷休  
蘇息 宿息 墨息 遊息

慰

少しのいこひなり  
小憩 暫憩 共憩

いたる

至

到 同し  
但到はやくの意又來たるといふ  
義にも成る  
至大 至剛 日至 交至  
到底 到來 意到 周到 總到

届

又至の意  
無遠不届

いほり

卷

虚 小屋なり賢入學士の世を避て田野に虚を  
かすぶ等  
草虚 田虚  
小虚

いとぶ

祝 神靈をいはふの意又のりて剣を  
卜祝 巫祝 奠祝  
三祝  
慶事といはふをいふ  
朝賀 拜賀 來賀  
稱賀

頌

朝賀 拜賀 來賀  
稱賀

いたむ

痛 疼 同し

傷 牙痛なり又劍付くるを刺す  
傷寒 百傷 悲傷  
傷風 憂傷

いゆる

瘡 瘡 瘰 大意同し

○君子は玉を懷て顧らばさか

負抱 乳抱 ○抱た兒は負た兒より愛深し

保抱

休憩 休暇 日休 逸休 乞休 罷休

蘇息 宿息 墨息 遊息

小憩 暫憩 共憩

至大 至剛 日至 交至

到底 到來 意到 周到 總到

無遠不届

いづれ

何 なんてあらふかといふ意  
孰一與 どちらかといふの意

いさる

賤

卑 同意にして卑の字は卑下卑  
劣の如くひきく下のこころ  
官卑 位卑 ○門地の卑を以て  
辭卑 其人を侮へからす

いよく

愈 彌 同意にして彌の字は意急なり

いつはり

偽 虚偽 情偽

詐 同意にして巧作るいつはり  
詭詐 弄詐 機詐  
變詐

いまむ

戒 誠 同し

禁 いたくいましむる意にして急切なり

禁制 嚴禁

警報警備の如く或は非常の告にあふて用意手當を成す等の意味に用ふ

警戒 邊警 傳警  
警規 夜警

いたゞく

頂 戴 冠 同し

いろどり

綵 重綵 麗綵 剪綵 衣綵

飾 色ざりよそれよの意

虚飾 文飾 彫飾  
采飾 裝飾 綴飾

いとすじ

縫

線 同意處により單に條の縫に用ひ則ち路線綴綴のとし

いさかゝ

功 績 同し

勲 王功と勲といふ

勳章 元勳 ○勳墨の勳汗馬の勳等 建勳 功に勳らむ

いさのみ

詩 唱 同し

いはんや

况 矧 同意又况を原況景況等のとく下に用ゆる時はありままといふとさう也

いつく〜む

寵 慈 同し

愛 同意にして又好するの意あり

友愛 遺愛  
仁愛 別愛

いさかゝ

忙 閑 同し

置閑 務閑 但閑は静かならむをわかしき意

いとけな〜

効 人の少をいふ

維 人の少きにむきらむ草木其他にも及ぶ事あり又群に作る

旗 旌 幟 同し

但旌は軍陣のはた幟は祭典等に用ゆるはたなり

はく

履 屐 共に沓をはくに用ひ又はきもの

佩 帯 事なり佩玉佩劍にて知るべし

はり

又針に作る

鉤 魚をつるはり

はく

吐 匿 同し

はじ

耻 愧 羞 同し

慙 内心にはづる事

自慙 内慙 ○慙を慙は慙は人の事也

心慙 腹慙 ○慙無ければ心慙に安し

はた

晴 霽 同し

但霽は雨の止むなり又空に纖翳無く澄み渡りたるも霽といふ光風霽月の如し

○ろの部  
○はの部

はな

花 草木に咲花なり

華 うるはしくはなやかにはてなる意

又つやと云ふ意も含む  
華美 華麗 詞華 總華  
華者 繁華 才華

はた

墓 墳

同トクはひなるも自ら別つものに似たり熟字に就て知るべし

神墓 墓 墓 墓 神氏之墓  
題墓 封墓 先考之墓

又墳は

皇墳 荒墳 孤墳

古墳 坏墳 ○墳あるも名を知らず

はじめ

元 首 同し

始 同意にして又はトまるといふ義にも成る

本始 謀始

無始 王道之始  
從之 脱始

初 又同意にして處に由り時といふ如き意にも用ゆ

太初 厥初 ○雨の晴るゝ初

創初 復初 ○國の開る初

創 創業創立といふ如くはトめて起したる事業等の事をいふに用ゆ

はたふ

膚 肌 同し

はるか

遙 遠 迢 大意同し

天遙 水遙  
度遠 清遠

各 廣大幽遠にして判然せざるの意

香々 露香 深香  
雲香 空香

はかる

度 物の長短をはかる事

量 物の多寡をはかり又力量器量のとく程度分限の義にも成るなり

力量 油量 智量

器量 句量 分量

衡 物の輕重をはかるに用ふ

權 衡 同し

計 つもりを立る事也計畧といふ如きとは別つなり

計並 會計 活計 日計  
計算 歲計 心計 家計

○學文は身を立て家を興すの計なり

測 量計の意を兼て見る

測 推測 臆測 ○坐ながら天を測る

遠測 探測 ○霧にて遠を測る

はらふ

拂 撥 共にはらひ除の意

掃 塵埃をはらひ不浄を除の時に用ゆ

洒掃 應對といはんが如し

掃除 却掃 ○花を掃ふて客を迎へ

揮掃 ○風の掃にまがす

はや

早 早天早朝早起の如くにてすみやかなるの意にはあらず

速 疾 共にすみやかなるの意

電速 捷速 敏速 巧速

疾風 疾雷 帆疾

はこぶ

送 足をほこぶ也

運 搬 共に物をほこぶ也

運送 搬運 陸運

運輸 通運

はまむ

錢 贖 同し 但贖は金錢を贖るに用ふ

はかりごと 又はかる

謀 計 畧 大意同し

圖 遠承長久のはかりごとにも多く用ゆ

遠圖 後圖 ○子孫の後業を圖るは

壯圖 教育を講ずるに注り

はなはだ

甚 酷 同し

太 俗にいふきよふらんならぬいふ意味

〇にの部

にる

似 肖 同し 但肖は子親の德貌ににるの義

不肖 才肖 ○愚き僻はよく肖る

德肖 ○親に肖たる海老の子

にじ

虹 霓 同し



にる 蒸煮 同し  
にわか

遽 頓 大意いつれも或は同し又遽は俗に  
いふあわてたる意

急遽 驟遽 ○静に歩行は遽に  
卒遽 乘遽 ○走るより速かなり

にくむ 惡 諱みにくむの意

憎 愛の反語

取憎 嫌憎 ○一旦の憎は業を助く  
生憎 愛憎 するの嫌かなり  
醜 惡の字の意

にぐる

退

逃 退 同しくしてのゆるいといふの  
意をたもつ  
逃亡 捕逃 ○逃くる敵を逐ふへかりや

ほとり

邊 帯にいふへりといふ事又邊僻邊境の如  
く又遠く王城をへたて外國に距る處を  
も云ふ邊地帯花少といふおほし

頭 邊の意にして僻境の義はなし  
千 邊は水邊といふは千河千のてし

はゆる

吼 哮 同し

吹 犬のはゆるに用ふ

ほむる

褒 褒賞 恩褒 榮褒  
褒美 寵褒

賞 同ト

尊賞 厚賞 懸賞  
上賞 世賞

讚 文書及書牒にてほむる

讚美 誦讚 銘讚

譽 同し名譽といふ時はほむるといふ  
義に成る

褒譽 虎譽 自譽

遠逃 ○網を逃くる魚

○ほの部

粗 畧 沽 同し

ほり

堀 俗に掘の字と誤り混し用や  
注意すべし  
壕 塹 皆城下のほり也

ほる

掘 あはきほる事  
うぢちほる事  
拵 斧鑿

彫

鑄 鑄 かたきもの即ち玉石の類を  
ほる事  
彫琢 篆彫 磨鑄  
彫刻 鏤彫 勅鑄

ほす

干 乾 又かわかす  
晞 かの部にいたす

ほろび

亡 なくなりうしのよの意  
存亡 荒亡 屠亡  
取亡 補亡

滅

滅 滅 一つぱりなくなるの意  
盡滅 剪滅 登滅  
國滅 撲滅 夷滅

ほこる

誇 矜 同し  
伐 功にはこる事

○伐る口は則ち毒を呑の口  
○手録に決して伐るべからず

ほとんど

殆 幾

○への部

船 艦 同し

へる

減

虚費のへる又身體の衰弱してへる等  
虚耗 衰耗 ○不熟の未だ貯る時は必を耗る  
虚耗 ○勞して衰はせれば精神耗る

べい

可容

同じ  
共に容のほつといふ意にてむく  
成るはつといふ時に用ふ

へだつ

隔

隔はへだてるといふ意もあり  
隔はへだつなり

深阻

へつらふ

諸

同じき如くなれどもこれを別けて  
は便宜を納といひ面従を説といふ  
戸部 面談  
年部 便談

○この部

蓬

舟の蓬なり

納蓬 孤蓬 新蓬

疎蓬 和蓬 菴蓬

苦

屋を覆ふこと  
寢言枕地

どこ

牀

同字

とも

友

親しきともなり

侍

ともおらといふ意處として友の意  
にも用ふ

区侍 前侍

臣僚 幕僚 府僚 同僚

官人已が部下の輩を幕僚下僚といふ

侶

道つれといふ程のとも也又ともおらにも

結侶 無侶

○乘は虎の侶にあらざ

とる

取

採 乘 把 捉 大同小異

と一

年

歳 同

載

年歳の字の代りに用ふる事あるも  
普通の文には用かへずなり

繪

みのもこと別し五載の熟するより吉來  
れり則ち一熟を一年といふ事もあり

續繪 大繪  
聖繪 五繪

と二

時

皆 同

辰

適切に其時を指すに用ふ

嘉辰 芳辰  
良辰 吉辰

秋

ちよふに其時やといふ意にて用ふ  
時辰の意に少し異なり

○力を盛すの秋  
○心志を果すの秋

と三

鳥

禽 同

執

管のいふ意又専らせる

執政 執事 執心

捕

執務 確執 固執

とらふるの意

捕縛 捕魚 捕捕

捕込 追捕

攬

人氣をさるの類務而攬は英陣之心の如し

次攬

手を握じてすくひさるの意青磁を陶

門や鐵を撈したるを如し

と四

磨

研 同

と五

問

詢 共に問ひはかるの意

訪

訪問といふ如く人を尋ねる事  
○故人を訪ふて時事を語ふ

とも

共

共有 共同の如し

與 同しといふ意  
俱 相俱といふ如く雙方ともに也

不俱生 不俱戰天  
不俱立

とが

料 通 夫 大體得し  
とがめといふ意にて幾列し也

引寄 引寄 引寄 引寄

とく

説 口にてよく

説得 説得 舟説

波説 波説 解説

譯 意をよく

譯書 意譯

譯文 解譯

解 氷雪の解くるが如し又凝固したる物をよくにも用ゆ又波説の意にも用ゆ解譯

和解 意解 ○結んで解けを

瓦解 ○器械を解て理を曉す

通 徹 ○一心の徹る鬼神も為に呼

ととる

透 透すまをるの意  
透明 月透 春透  
光透 解透

融 透を同しくして又通徹の意にも用ゆ

ととる

透

はるやなる意先の見へぬといふやうなる處に用ゆはの部にも出す

とのち

稱 名稱のこなへ又稱美等の稱ありてはむる意に成る事あり  
稱譽 稱呼 見稱 自稱

唱

詩歌をこのふる事  
高唱 絶唱  
源唱 清唱

とづる

閉 門戸をこづるといふ

織 書冊及眼口をこづる

書織 波織 ○梅花雪に織ぢらる  
心織 華織

綴 衣服及書冊をこづる

とがす

扇 門戸をこがす

鎖 同しくして又封の字の意にも成る

雲鎖 烟鎖  
霧鎖 花鎖

ととまる

止 駐

同しくしてしはらくととまるの意

停止

○筆を停て字を撰らじ  
○半を停て人を通す

留 亦同トくして又しく留るの意をふくむ

留連 久留 尚留  
留滞 稽留 滯留

宿 泊 ともに旅宿旅泊のとくやこりことま

ともから

革 曹 齊 徒 同ト

倫 たくひといふの意

人倫 同倫 絶倫  
超倫 等倫

ととのち

調 和合の意たり合ひのよき事不充分ならざるの意

整 法則及威儀等のことのふたるに用ゆ

完整 嚴整

俯整

齊 調整の意を諷ぬ

○ちの部

ちり

塵 騎 壁にも作る同ト

○天晴れて雲なきは雨に近き氣象なり

埃 塵と同物にしてはこり又埃氣と稱へ  
一の氣に見成す事あり  
若埃 薄埃

ちかひ

近 通 同し  
但近はたも近功の意

密通 密通 ○遠きにいたるは通よりす  
發通 ○耳目より通し

ちかひ

誓 いましめちちよ事  
誓約 誓文 誓言

盟 約束の意

盟約 盟主 舊盟 同盟  
盟會 酒盟

ちかひ

親 和親 朋親

睡 親と同しくしてなるの意

押睡 籠睡  
私睡 親睡

○りの部

○ぬの部

ぬく

扱

扱華 扱扱 塵扱

扱刃 超扱

ぬきいたす意

扱

秀扱 峻扱 ○衆に扱て業を修む

英扱 攢扱

抽

扱の意又ぬき出でたる等にも用ゆ

新抽 芽抽

荀抽 苗抽

つらぬく事

貫

貫通 貫徹

ぬふ

縫

同下意にして又ぬふ繪衣紋の縫等  
にて美術に体る

刺縫 文縫 ○衣裳に花をぬふ

線縫 錦縫 ○巧に縫たる涅槃の圖

とり

撮 押 又圓に作る同意

とく

置 位置 配置 例置  
易置 標置

措 停止の意又し置きやめる事

安措 投措 ○良友と好書を讀む俱に  
難措 措を忘る

とす

推 推と同しくして又をし移るの意あり

震盪 跳盪

磨盪

押 ぬきぬくとも制し強てたすの意又制を  
たす等にも用ゆ

ときを

新

更 新と同しくして又すべて老人の尊稱  
とも成る

とめて

ぬぐ

脱 衣帶とぬぐ事

押 脱と同しく用ゆる事あり則ち兜を  
ぬぎ帽をぬぐ等なり

ぬる

瀦 瀦 同ト

ぬすむ

竊 ひそかにぬすむ事いはゆる竊盜の如し

偷 亦竊の意入眼をぬすむ術の目をぬす  
むが如し

偷安 暗偷 語偷 ○閑を偷て書を讀む

巧偷 ○日月を偷て録

○るの部

○との部

とぬ

丘 陵 岡 阜 同ト

表 うちたもて又上表箋表といふ時は書札の事又師表簡表代表といふ時はあらわし示すの意

とくふ

蓋 蓋 覆 大意同ト

とくふ

饋 食物をたくる

贈 遺 物品をたくる

○松江の鹽を贈る

送 行をたくる

送別 目送 送行 供送

とどる

踊 躍 跳 但跳はたどり揚るの意

龍跳 魚跳 雀跳 雨跳

とろか

愚 癡 同ト

とどる

審 審 同ト

とくふ

多 衆 同ト

鏡 帝に多く用ひた本にたが成る意より来る其ころあるべし

とくふ

思

懐 人を思ひ古をたもふ感懐の情をふくむ

迷懐 遠懐 壯懐

想 形を見すして心に思ふ事則ち想像也

夢想 空想 遠想

念

深くたもふてわすれぬたき意

記念 ○碑を讀て古人の徳を念ふ

記念 ○もめる念ひ

とくふ

侵 同意又探め奪ふのころにして他の臣に立入るの義あり

侵境 侵地 ○互に權限を侵す

○執る事固けれは侵されず

とくふ

起 興 上意同ト

發 起と同しく又所として發明の義

發心 發意 齊發 共發

發誓 開發 告發

とくふ

及 逮 追 相同

暨 及の字に同しく用ゆる事あり

とくふ

恐 懼 怕 惶 怖 大同小異

とつる

落

墜 命をたもたす等に多く用ゆる

星墜 霜墜

段 後 しんかりともいふ軍陣に入敷を引揚る時後軍となりて敵の逐ふをふせく事よりたくるともいふの義に用ゆる

曉 用ゆる

とくふ

惜 しゆく物たしみをするの意

吝 吝 貪吝 ○吝みて桃の實を斫る

悔吝 悔吝

番 亦に似て異なる所あり

儉書 容書 ○萬の事會て度を越へず

節書 節書 ○身を保つ秘訣

變 孝子は日をたしむ又變ニ牧羊といふの類にて所謂變の義也

とくふ

教 訓 誨 同ト

大意同し訓は開發誘掖の意を含む

とくふ

犯 冒

犯冒 犯冒は風雨をたかし矢石をたかす等

とある

終了訖 畢竟 大意同  
已 盡るの意にて自然にたゆる事

とさまる 又をさむる

治

脩 身をたさむ又藝術をたさむる等

理 條理によりてたさまりをつけ又こゝのふるの意

修理 料理

整理 整理

納 藏 収 いづれもいれたさむるの意

と、いなり

大 巨 洪 碩 宏 大同小異

偉 偉人偉丈夫の如く又たけの高き事

○海島の人はずべて偉なり  
○蹠の偉なるを尋ぬ

とどろく

驚 駭 愕 同ト

○あゝの部

われ

我 余 吾 予 同ト

わさ

腋 脇 脅 同ト

わた

綿

綿の粗なるもの又柳に生ざるわたを

絮といふ

柳絮 綿絮

飛絮 蓬絮

わく

又涌に作る

海水等の湧をいふ

湧 雲湧 潮湧

川湧 濤湧

同し湯の類のわくに用ゆ

鼎沸 鼎沸かとし

井沸 井沸かして時事を談ぶ

わざ

業 事 功業なり事業なり  
又なりはひ

卒業 宿業 精業

世業 家業

術なり業なり

技 技量 技能 小技 ○處を脚の技も技能に至

技術 衆技 此は名を天下に傳ゆ

わらび

穢 穢同ト

こぼさる穢といひ染ゆるを穢といふ

わか

若 少 同し

稚 幼穢といふていりなり

穢 草木の芽出し等のゆきなり又

穢 穢 穢

穢 穢 穢

わたる

渡 渉

わたりたりにする事又時として舟にて渡るにも又群書にわたる眼力のわたる等にも用ゆ又渡渉といへは山河を經する事

目涉 博涉 遠涉

通涉 歴涉

渡 濟

渡渉の意を兼ぬ又涉世經濟といふ時は利用するの意を成るなり

是はわたりにいふ義にて彼は是とのわたりに義河といふ處に用ゆ

わする

走 奔

奔 同ト 奔又奔に作る

趨 走

行歩の早きといふ

遺 遺

遺 遺 遺 ○用無きに遺るべからず

遺 遺

遺 遺 遺 ○遺れは遺事多し

失 遺

遺 遺 遺 ○遺れは遺事多し

わぬる

分 分離分派の如く區別を爲すの類なり

又わなつ

平分 等分

区分

判 分の意にして断定する事

判然 判断 裁判 ○優劣判る

判決 ○廣告で能く判る

判 人にゆかると又種類の中なる事分を通ずる事あり

別居 別格 決別 ○別れて衆を管む

別置 特別 ○別れを管む

わらふ

笑 又笑に作る 哂 噱 同ト

わづか

緩 愼 同ト

わざはひ

禍 背 同ト

災 水火のわざはひをいふと天より降す災也

救災 恤災

再ん災

災 鬼魅禍のわざはひ

妖怪 妖怪 天災 ○妖怪は國の妖怪

災魔 災雲 人災 ○神聖の災は精神の災

客 禍災をも兼ていふ

わづらひ 又わづらはし

勞 心體をわづらはす事

苦勞 心勞 ○勞に耐へざる人は幸福

徒勞 を得ることせし

類 形の上に付てわづらはしきといふ

類劇 政類 理類 ○山中に泉の聲を聞

類忙 紛類 解類 類はしむらす

わかじに。

天 瑞 同ト

○かの部

かさ

笠

傘 きぬやう又しやう

傘 日月のやう又しやう

かじ

陰

山のやけ家のやけの如くにて影を別つ也

山陰 背陰 綠陰

背陰 同ト

又陰を同しく用ゆる事もあり

虎陰 世陰 動陰 ○聖明の陰に味ふ

美陰 靜陰 ○祖先の風を味ふ

かり

雁 かりを訓せる事あるも多く何を見せ

鴻 かりを訓せる事あるも多く何を見せ

かき

垣 牆 同ト

かい

權 棹 同ト又しほとも

かね

金 づりやね

かく

掻 抓 同ト

昇 輪輿の類をかくに用ゆ

かゝる 又やうり

借 籍 同ト

假 かの意代表の意又借の意にも用ゆ俗

に假の字を書するはあたらゆ

假裝 假貸 寬假 優假

假想 真假 虛假

かりを訓するは攝官を推こいふより

來たる幣には用ゆ

かめ

瓶 甕 同ト

かり

柄 柄 同ト

柄 柄 同ト

○基に耽りて斧の柄の朽るを忘れし人あり

かざ 句 鈎 同ト

から 散 尸 同ト又しやゆぬ

かす 糟 糲 同ト

滓 俗のなりといふ事にて流動物の穢物  
風滓 渣滓 ○劇樂は滓にて人も人を害す  
泥滓 ○滓にも穢る蟲あり

かむ 齧 嚼 同ト

かゝ 駈 駈 同ト

かり 狩 捕 獲 意 此同時等を以て別つ事  
あるも拘るべからず

かわ 川 河 同ト

大流を河といひ細流を川といふ事あるも拘るべからず

かゝ 刈 莖 同ト

かふ 買 沽 同ト

購 又金錢をかけてあかひつるの事にも用ゆ

かむ 敷 員 同ト

計 ばかりかそへるより来る單にやどといふ時には敷員の字を用ゆる方よろし

かど 角 稜 大意同ト

麻 方正にしてきまりのよきをいふ俗文に要領を擧げて麻といへるは的切ならん

かゝ 状 遺傳 肖像 又想像等の時には人にかきとす 時の景況をいふに用ゆ俗のありすがたといふの義 情状 ○状を聞て情をささる 殊状 ○好文章は状を述て人を動す

かざり 飾 裝飾 文飾 采飾 戒飾 彫飾 色粧 墨粧

かぶと 甲 兜 同ト

かざり 限 期 同ト

際 際 際 天際 ○水と雲との際り 雲際 曉際 ○人智の際を知る者なし

銅 養 同ト

かれ 彼 渠 同ト

からす 烏 鴉 同ト

かいら 又やん 首 頭 同ト

かまふ 拵 物とのせかけの事にてかまふこと制する事あるも綴らざし

かたち 形 圓形 方形 地形 圖形

容 多くは動物のかたちに用ゆ 麗容 城容 嬌容 玉容

鏡 容と同一くして相鏡容貌のとし 像 容貌に同じくして多くは人のかたちに用ゆ



かたる

語

又體に作る

談話につけてはなしての語

單談 笑談

○古を語るは多言も其

怪談

身に尤めなし

かゝる

掛

懸

○もにかゝりかゝはるの意

國懸 高懸 解懸 拘懸

懸架 心懸

係

ちゝりあひあはるの意干係といふ如し

罹

○兼の意にして病にかゝる災にかゝる網にかゝるの類

かぬる

蕪

蕪くかぬるの意

博蕪 前蕪 ○昔人は宇宙の理を蕪ぬ

編蕪 ○簡略にして昏蕪ぬ

包

談の意又つゝむの義あり

かほる

更

かほりあらたまる意

更迭 更換

換

又更の意にしてかわるといふ義もあり

改換 物換 ○地を換へて種を

交換 ○肥を換へて養ふ

代

かほりといふ意則ち代價惣代等の如し

易

變換の意をかぬ用ひろし

かほる

蒸

同下

かゝる

枯

同下

涸

水の乏む事

憂

弊の乏む事

かゝる

協

同下

適

己が欲する所にかなふ意

からー

半

半

半暗半夜の字ありて情にうすき

かへる

緝

反

かへつてこいふ意にて背反する事

復

ふたゝびするの意

往復 重復 ○復り笑きは香はしかりす

來復 顧復 ○覆て温められは冷へ易し

還

大際復の意にして又歸るの義にも用ひ

かゝる

乾

干 同下

睇

乾の字の意にして又かわかすといふ時

にも用ひ又明の字の義にも用ひたり東

方未睇の如し

かゝる

欠

不足するのこゝろ

働

はたらくといふ字にて働働物にかゝると

察

かせく

匿

又かくすの意かくれるといふの義にも

用ひ

隠

同下

秘

かくすといふの意かくるといふの義にも

寝

又かくすの意かくれるといふの義にも

寝

又かくすの意かくれるといふの義にも

寝

又かくすの意かくれるといふの義にも

寝

又かくすの意かくれるといふの義にも

寝

又かくすの意かくれるといふの義にも

寝

又かくすの意かくれるといふの義にも

寝

又かくすの意かくれるといふの義にも

寝

又かくすの意かくれるといふの義にも

寝

又かくすの意かくれるといふの義にも

寝

又かくすの意かくれるといふの義にも

寝

又かくすの意かくれるといふの義にも

寝

又かくすの意かくれるといふの義にも

寝

又かくすの意かくれるといふの義にも

かたー

圓 堅 牢 同ト

硬 硬 かたまり強き意又硬は骨のつよきなり正直の臣を骨鯨の臣といふ

強硬 ○皮肉硬して針を防ぐ  
瘦硬 ○清油の硬きは用を濟しおたし

かつて

普 普 同ト

かんばー

香 芳 芬 同ト

かむぎー

紋 簪 鈿 同ト

かぶむる

蒙 被 同ト 但被は衣をかむむり傘をかむむる等

被覆 被覆

被服

かなーむ

悲哀 同ト

かさなる

重 層 同ト

累 わづらひにも制しいやにせなるの意

累々 應累 ○危きこと累ねたる卵の如し  
滯累 ○飲食を累ねれば病を醸す

かたむく

傾 傾 國をかたむけ城をかたむく等意味

倚 倚 かたよるにも制し傾に對すれば意輕し

低 意味又さまし

月低 月低

精低

か、やく

耀 曜 同ト

輝 ひかりはのふこいふ輝の意をたもつ才徳威力のひかりややく等

聖輝 靈輝 燦輝 ○國威を四海に輝や照す  
德輝 祥輝 瓊輝 ○玉輝きて山輝はる

かんがふ

考 校 はかりしらべ考ふる事  
校定 校閱 校規

勘 考物<sup>ノ</sup>意を兼ぬ

か、はる

拘 抱 同ト

かへりみる

顧 顧 同ト ○雜談にも左右を顧みよ  
○非は人に違ふて明る

省 心にかへりみる意にて行狀及び業務の如何等をかへりみる也

修省 内省 展省

返省 警省

かまびすー

空 鳥雀喧  
人語喧

驚 同しくさわおしき意  
驚々 驚駭 驚駭

○よの部

よー

善 善 大意同

好 美 共に相よみするの意

交好 情好

世類中心のよき事

賢良 明良 忠良

聖良 任良 才良

美の意

佳人 麗佳

佳辰 純佳

許話の詞

認可 裁可

祥 吉の字の如く又さかむひ

祥雲 偵祥 百祥 呈祥

祥瑞 降祥 占祥

よぶ

呼 喚 同ト

よる

因 由 よつて起るの意又もこころの意

元因 起因 由来 事由 緣由

前因 由緒 理由

依 頼 憑 同ト皆よりたのむの意

倚 依の同しくして又よりかゝるの意あり

凭 よりかゝるの意

凭 凭 凭 〇開を偷んで寮に凭る

據 よりどころの刺す又因由の幾及証據の

據 〇城に據りて謀を運らす

〇商標に據りて品を購ふ

よむ

讀 誦 同ト

讀 誦 但誦はそらよみなり

讀 誦 推韻 替者能韻

よ

葭 葭 飛葭

葭 同物にして大なる者又一葭といへば舟

葭 同物にして大なる者又一葭といへば舟

よろひ

鏗 鏗 同ト

よる

莛 草の名にて又亂れたる貌にも用ゆ

莛 莛 莛 又首如三飛莛

艾 藥草の名各治に用ゆるにより各草の名

よろこび

喜 欣 同ト

悦 たのしみよろこぶの意又よろこび服従

悦 するの意

悦 悦 悦 〇政平にして衆皆悦

悦 悦の意に用ゆる事あり

慶 福を賀するよろこび又さひはひ

慶 賀 家慶

慶 祥

よろねひ

粧 又妝に作る

粧 面貌のせざり作りなり

装 夜帯装束のよそねひ又いでたち

装 飾装 假装 〇佳人の装ひ秀雅なり

○たの部

たつ 又たてる

立

建 國をたて又計畫をたて又家をたつるの類

建 白 營建 封建

建 議 開建 碑石をたつる等に用ゆ

樹

たま 珠 同ト

壁 是は瑞玉にて透光のたまを建城のたまに

壁 いふ目出度有るの玉也

たて

楯 干 同ト

たる

足 たくる處なき意隙を同しく用ひ妨げを

足 區別なし難し

贍 智識及衣食の潤澤なるに用ゆ

贍 餘りあるの義

贍 才贍 豪贍 〇金と智識は贍ると

文贍 學贍 力贍 〇山中には水と新と

だけ 又毒に作 嵩 同ト

たに

谷 洞 同し

谷 洞 但洞は水の無きたに

石洞 花洞 絶洞

碧洞 竹洞 松洞

水の有るたに又川にも用ゆ

池 溪 澗 溪

たま

棚 架 大意同

店 俗にいふみせの事にて棚架を全く異なり

本店 酒店 〇衆昌の店には空棚無し

分店 茅店 〇氷店には月が上客

たね

胤 種

胤 人のたねにて植物のたねと別つ則ち何

胤 家何某の後胤といふ如きなり

帝胤 苗胤 ○胤を撰まざして人を撰じ  
胤胤 ○系圖の序書は大概名家の胤

たけ 長丈 同ト

たつ 裁 截 同ト

たて 縦 横の反語

登 同意にして又立の字の代に用ひたる  
事と稀にあり

たつ 断 絶 同ト

たゞ 只 唯

音 但唯はひりりといふ義に見て用ひ  
たゞに割したゞこれゆりてはなる  
といふ意に用ひ

たかー 高 山のたかき丈のたかき徳のたかき等

隆 隆盛豊大の意にして其用甚大ひなり  
素より高の字の意も含む

たけー 隆運 優隆 ○隆き御代の恩に遇ふ  
光隆 ○出世して昇隆し

建 健 同ト  
猛 同意にして勢威のたけきといふ  
威猛 鷲猛 剛猛  
政猛 勇猛

たから 賢財 貨 並同

たくみ 巧 工 同ト

たがひ 匠 工人師も大工の事又師匠宗匠の如く  
師の稱にも用ひるなり巧工と異なり

違 互 更代の意則ち順次したがつてなす意  
に成る也  
違送 順送

たより 便利の宜きにしたる事

信 便利 簡便 鳩使 ○便に任ずれば勞を省く  
便宜 風使 ○簡を問ふに使なし  
通信 電信 雁信  
書信 花信 好信は對ちら

たゆる

耐 堪 たへしの事  
任 その器量にたゆる事

力任 肩任 ○能く其職に任む  
○任へて力むるは疲れ  
て功なし

禁 恐不<sub>レ</sub>禁といへば恐ひぬる又こらへ  
られぬといふ意  
幾度禁 ○禁へぬ恐ひに心を禁まず  
醉克禁

勝 不<sub>レ</sub>勝<sub>レ</sub>力といへば力にあたはぬといふ意  
大よふ任<sub>ニ</sub>同ト

たどる 倒 什 同ト

類 類 類 類

斃 類 類 類 類  
斃 動物の死したる又斃をたどすといふ様  
成る時に用ひ  
自斃 牛馬斃 ○斃れて後に止む  
○國家の爲に斃る

睽 睽 睽 睽  
睽 睽 睽 睽  
睽 睽 睽 睽

差 彼此比較して齊しからざるのたがひ又  
連<sub>ニ</sub>同しく連<sub>ニ</sub>事もあり  
不和 錯亂の意を兼ぬ

辨 錯辨 辨辨 心証辨  
辨辨 辨辨 辨辨  
○音曲の調らへ辨  
○字義を辨へば文  
に成らす

たのむ 類 類 類 類

たぐひ 類 類 類 類

倫 人類の内に就いていふたよひにして又つ

人倫 五倫 同倫

罪倫 起倫

比 朋黨の意又たくらべならべくらぶるの

終にして類倫を同ららむ

朋比 ○同窓の友は金蘭の比をり

昵比 ○阿は弄の比に近し

たむる

播 揉 同ト

たもつ

保 所有也

有 所有也

專有 共有 ○素封家は多くの田と山と

人有 私有 有つ

持 維持保持の如く見るべし

持重 維持 堅持

持續 保持 維持

たどへ

響 喻 同ト

たのり

例

法といふやうなる意にてたどへは柳家の  
様といふは柳家の法トやといふ意になり  
又法といふ意に見ると同ト事にて近衛様  
今様の如し

たすく

助 扶 輔 弼 介 佐 大同小異

たまふ

賜

厚賜 慰賜 實賜

錫

又賜の意

永錫 帝錫 養錫

給

九銀 師錫 給與給養といふ如くめておふの意

たどひ

假令 假使 同ト

たつとむ

尊貴 同ト

尚 尊貴と同トさしくにして氣品の大つて

き等に用ゆ又堂々慕ふの意

尚武 尚志 高尚

高尚

たくもふ

貯 蓄 同ト

殖 ふやしたくわふるの意

殖物 學殖 融殖

殖産 蕃殖 農殖

たいらめ

平 夷 又たぬらよといふ意にも用ゆ

坦 坦如砥といふやうに高低凹凸のなき

坦坦

平坦 道路如砥

たまへぬ

魂 魄 陰陽の區別あるも先づ同意にして

見る尋常は魂の字を用ゆるなり

たづぬる

尋 人をたづねる中にたづぬるといふ意にて

してさなるの義も兼ぬ

温 たづぬめたよむるの事

温故 温習

○故人を尋ねて昔遊の  
壯なるを温む

たのしむ

樂 娛 同ト

たふかひ

戰

聞 争の意又戦の意又時により戦の義トも

用ゆ

半聞 戒聞 ○市に相争の聞ヲ言し

○撞の浦の聞

たちまち

忽 即座に眼前にといふの意

倏 忽に比し尤も急速の意

たやすく

容易

輕 輕易なるの意

○れの部

○ろの部

そら

虚空 大虚といふ時は大空といふに同ト又虚言虚言等は俗のろといふ意

ろう

傍 寄り付く意

○水に傍て機を造る  
○肥は母に傍て寐る

ろ

沿 沿半といふが如くしたおの義も有りて順を逐ふてそよの意

添

加ふるの意

添薪 酒添 病添 ○雨に風添ふ

添書 愁添 ○豆腐汁に陳皮を添ふ

副

おなふの意をへるといふ時は添と同しく又附属の意

副意 ○獨松の名は別荘の使丁に能く副ふ

そこ

底 飾に用ひ物の充つる意

その

園 苑 同ト

園 同トして又歌謡を流る音よその

葉園 靈園

そぐ

殺 射 同ト

批 多く用ひた竹批雙耳峻といふ様なる時はそけたるかたちをいふ

そまへ

備 不虞のそまへ軍陣のそまへ等用意手當の事に用ひ

供

武備 軍備 器備 完備 週備 充備

宿客待遇のそまへ祭典のそまへ等

供給 法供 疏供 供給 清供 齋供

そく

灘 液

同ト 但液は口そ、よなり

雪液 炭液 鹽液 石液

そむく

反 背 同ト

平

運ひそむく意にして約束のたおひたる天時のたおひたる等也

命平 運平 ○氣路に平きて積るものは

時平

登らざ

暇

平と同しくたおひの意なりたの暇に出す

そしる

誘 誑 同ト

同ト 但誘はぬたふそしるの意

そねむ

嫉 妬 同ト

猜

同意にしてうたおひそねむ也

忌猜 花猜 嫉猜

そろふ

揃 整 同ト

そばだつ

側 時 同ト

歌 岸 同ト

かたむきそばだつの意

○つ部の部

つら

つらなるの意下に出す

行面

つば

平坦なる處をいふ壺と異なり又地積の六尺四方をも坪といふ

坪壺

つ

つき出たる形にも用ひ

突

突然 曲突 圓突

衝

突出 唐突

撞

撞をつくに用ひ其他にも

折衝 雲衝 ○頭髪みな衝く

擊撞 ○血氣胸を撞く

衝 衝 ○流れ急にして舟を衝く

つぐ

継 續 つぐつぐつたの意をいふ

接 接 つぐつぐつたの意をいふ

應 接 交接 ○戯れに争ふも言を接と

つく

附 附き添ふの意附屬附帯の意

服 官職及力役につく事又なつくの意

就 服 服 心服 臣服 歸服

就 即 共に大意服に同

就 職 去就 成就

著 用 用 用 用 用 用 用 用 用 用

著 著 著 著 著 著 著 著 著 著

著 著 著 著 著 著 著 著 著 著

つね

常 常 同

庸 庸 平凡の意

才庸 庸庸 ○玩ぶ器は庸なるをよしとす

○世の庸の人には非ず

恒 恒 恒 恒 恒 恒 恒 恒 恒 恒

恒 恒 恒 恒 恒 恒 恒 恒 恒 恒

つぐ

告 告 同

つる

釣 釣 魚をつる

拘 拘 拘 拘 拘 拘 拘 拘 拘 拘

ついで

序 序 序 序 序 序 序 序 序 序

序 序 序 序 序 序 序 序 序 序

序 序 序 序 序 序 序 序 序 序

敘 敘 敘 敘 敘 敘 敘 敘 敘 敘

敘 敘 敘 敘 敘 敘 敘 敘 敘 敘

造 造 同

つとむ

勤 勤 力 彊 大同小異

務 務 務 務 務 務 務 務 務 務

務 務 務 務 務 務 務 務 務 務

つかひ

使 使 使 使 使 使 使 使 使 使

使 使 使 使 使 使 使 使 使 使

使 使 使 使 使 使 使 使 使 使

使 使 使 使 使 使 使 使 使 使

使 使 使 使 使 使 使 使 使 使

使 使 使 使 使 使 使 使 使 使

つとむ

悉 悉 同

悉 悉 同

瓶 瓶 瓶 瓶 瓶 瓶 瓶 瓶 瓶 瓶

瓶 瓶 瓶 瓶 瓶 瓶 瓶 瓶 瓶 瓶

つかる

疲勞 同ト

羸 倦 甚だつかれたる意又老廢して用を成さぬ義にも用ゆ

老羸 瘦羸 既羸

つらに

終意 卒 同ト

つらなる

連列 同ト

行 つらなり行く時又字一行數行といふやりの時に用ゆ

亂行 露行

聯 同意にして又密着し相合ふの意もあり又ならぶ意

聯帶 句聯 詞聯 聯合 珠聯

つらむ

敬 事務に對してのつらむ

慎 心中のつらむ

敬白 敬上 ○向を見て敬は心にはつらむ 敬具 ○敬て爲せば手戻無し

つかまどる

司主 同ト

つまびらぬ

詳

審 同意にして意味愈々深細也

精審 研審 明審

○おの部

ねる

煉 樂をねり技術をねる其他 煉兵 鍛煉 精煉 煉藥 研煉

練 熟するの意又ならむの意 ○光澤ある練絹

ねむる

眠睡 同ト

ねらふ

狙

観 規 共にねらふと訓が又うやむや

○なの部

なま

名 號 同ト

齊 俗のまことへ評判といふ事

齊價 齊聲 ○齊を取るに錢を収るは齊聲 仁齊 道を離れず

なへ

苗 青苗 穂苗

秋 穂のなへにて他には用ゆるを見ず

秋波 神秋 分秋

なく

帯 鳴 同ト又鳴はなるとも訓が

泣 かなしみなくの意又なみ

泣血 泣泣 泣泣 ○玉を擲て泣く 泣慕 愛泣 善泣 ○泣く男も指られず

なみ

波 浪 同ト

濤 大なるなみ 又松濤は松風なり

飛濤 浪濤 浪濤

なだ

難 航路に難き處をいふ極東難波津州難の如し又瀬の字の義にも用ゐたる事あり

なご 訓トたる事あるも大洋の事にして難を別つ

なむ

難 同ト

なる

馴 なつゝなるの意

馴馴 難馴 ○牛は馴れても人を突く



押 習ひなるゝの意又ちヤツクノ意

恩押 親押 欺押 ○押れたれは押ぬ掛  
推押 近押 と思へ

褒 なれけおるゝ意

懲 懲 罰

なる 又なす

成就 同意

爲生 作 大同小異  
つくりなすの意

濟 なし助るの意又時にヨリ成配の義  
にも用ゆ

なほ

猶 なほ何の如しといふ意に用ゆ

尚 その上にいふ義又かふるの意

○銅貨に孔ありたれば尚よからん  
○勝ある熊に尚ほ皮

まゝ

無岡 亡 同下  
但亡はまづつばりなるといふ意

まが

長

永 永遠永代の如く長入の意なり

情永 遠永

請 請付兼請等の意に用ゆ多く書せや

まらふ

註 つらなりならん意

並立 並列

並行

雙 二つならび揃うといふ

雙玉 雙方 無雙

まげ

敷 敷 同下

まらふ

習 ならひなれるにて重ね習ひるの意

練習 慣習 練習

敷 敷 同下  
真似るの意則ち体にならふ露にな

なづる

撫 摩 同下  
但摩はきしりするの意

研摩 手摩 ○手で摩て口で撃つ  
肩摩 按摩 ○摩て火の出る劇藥

なかば

半 物の半分をいふ

半切 天半 折半  
半数 歳半 春半

央 中央の義にして堂の中央といふは堂のま  
ん中といふ事然れども亦半の同意に違ひ  
見なす事まゝ多し

なみだ

涙 泪 涕 泣 同  
但泣はなくとも上に出す

なんじ

汝 子 爾 大意同下通例汝の字を用ふべ  
し子爾の字は常に用ひざるも  
實亦に妨げなし

なんぞ

何 奚 いかめたる詞也いづくんぞと訓  
するも同下

胡 曷 なせにといふ詞

那 なにとしてといふ事

安 何の同意にして語氣少し緩やかなり

なかれ

勿 莫 同下

なかだち

媒 紹 介 大意同下

なりはひ

業 縁 續 同下

なげうつ

抛 玉石をなげうつ等に用ゆ  
又業務をなげうつにも

擲 なげうちすつるの意の時によく用ゆ  
大概抛の義と異同すくなし

弄 弄 投 弄

なぞらふ

準 法則をこる事に用ゆ規矩準繩といふ  
が如し

標準 比準  
恒準

擬

なすらしの意又めておふの意  
比擬 注擬 ○口利も需を鴉に擬ふ  
摸擬 參擬 事は難し

なんなんこす

向垂 同ト

○らの部

○むの部

むね

宗

祖宗宗家の如く又文宗といへは文章の  
名流衆の推して尊む詞

宗匠 儒宗  
禪宗

統

宗の意又すべさぬる事

統一 皇統 王統 垂統  
統緒 聖統 儒統

音 甘

同ト  
趣意の異也

むら

村 又郷に作る

邑 村の大なるもの

國邑 城邑 郷邑 邊邑  
郡邑 井邑 食邑

むね

胸

心

尋常多く用るが  
胸の意なり

撫心 ○顔色を見て心を覺る  
捫心 ○心を刺すの思ひ

むかふ

迎 出迎の意

迎賓 逆賓 ○庭を掃て客を迎ふ  
郊賓 惟賓 ○春を迎へて氣長閑なり

邀

むかへるこいふ意にしてまねまも  
むるの意

款邀 朋邀 ○月を邀へるの高樓  
氷邀 招邀 ○邀へざるの朋來たる

むしろ

席 筵 同ト

むくい 又むくゆ

報

陽報 施報  
德報 望報

酬

酒杯の獻酬より來る

應酬 飭酬 舉酬  
唱酬 對酬

むすぶ

結

水をむすぶのこころ

一擲 手擲 ○擲んで金沙を擲ふ  
半擲 擲盈 ○深水を擲て渴を忘る

むな

空虚 同ト

むしろ

寧 無一乃 同ト

むらがる

群 簇

同ト  
但簇は湊ひ合ふの意  
簇々 王簇 雲簇 ○國鏡にして人烟簇る

樹簇 花簇

○うの部

うす

白 磨 同トくして磨は俗の斗うす攪うす  
に用ゆ

碓

俗のからうす也

うみ

海

溟 洋 大意同ト

洋は則ち大洋なればそのこころ  
あるべし

うね

取

畦 疇 畔 大同小異

但畝畦は土地の面積の稱に多く用ひ  
畦畔は境界の名也なる

うつ

打

擊 共に手にてうつなり

交擊 相擊 對擊  
排擊 目擊

討

伐 追討征伐等の如く強勢にてうつ

天討 窮討 新伐 誅伐 征伐  
披討 口伐 優伐  
撲 風雨をうつ營をうつ類

取 〇無能者の閑ある時は繩を横つ  
意味横に近し  
非敵 輕敵 〇門を敵て犬に喰へらる

得 獲 同し  
但獲は息もの義

奇獲 田獲 〇狩がぬ獲ることなし  
魚獲 〇虎や獲の術を得る

飢 又饑に作る

鐘 五穀登らざるをいふ  
凶鐘 飢鐘 〇鐘の備は平年に在り

餓 一人の食とほしきをいふ  
餓鬼 困餓 寒餓 〇黄金を懷て餓る  
餓草 飢餓 窮餓 者は鮮し

うつる 〇身の才は被はるゝ事なし  
〇位階を被はれて名譽去る

遷移 徙 大同小異

寫 傳へりつすの意にして寫の字と大差なし  
騰 傳へ送るの意にして寫の意と異なり

動 振 同ト

薄 厚の反語  
薄弱 淺薄 輕薄 浮薄  
薄德 脆薄 鄙薄

淡 又澹に作る  
濃の反語  
淡泊 平淡 冷淡 酒淡  
淡水 交淡 味淡

うくる

賈 沽 同ト

植 栽 種 同ト  
樹 藝 うくる事に用ゆるも時所に由るへし

潮 汐 同ト

理 座 同ト

恨 怨 懟 同ト  
憾 のこりたしきうらみ  
憾嘆 遺憾 憾憾

うたふ 謡 歌 同ト

奉 澆 同ト  
但澆はめたへたるものと奉ひこる  
の意又ぬおすといふ意味もあり

承 受 同意にして又うけおる許諾の事  
敬承 奉承 順承 〇承けたる事は留  
敬承 順承 敬承 順承 敬承 順承

請 稟 同ト  
こひうくるの意  
稟請 稟申 奏稟  
稟議 稟稟

享 響 應をうくる事又壽をうくる事

背後 同ト

美 麗 多くは容貌の上に就ていふ  
麗麗 光麗 女麗  
麗冶 花麗 嬌麗

うるたふ 濕 雨露にうるたふ  
露 又沾に作る同意にして恩徳にうるたふ

恩害 窮害 害れして偏きは害が代の恩  
 仁害 深害 春の雨鳥物を害す  
 潤 同意なるもにぎはしむたかなる意を持つ

潤澤 秀潤 ○鏡山は野を潤はす  
 潤飾 ○字頭と調の尾に家は潤ふ

うたがふ

疑

精 うたがひそねむの意又猜忌等の語  
 ありて人の腹めしき事にも用ゆ

嫌

うたがひきらぶの意  
 猜嫌 遠嫌 恐嫌  
 宿嫌 別嫌

うかゞふ

伺 窺 同ト

うつつたふ

訥 訟 同ト

うれふ

憂 憂 憂  
 憂 憂 憂

愁 かなしみうれふる意

愚傷 害愁 窮愁  
 愚敬 愚愁 窮愁

患 くるしむ意疾をうれふる等に用ゆ

うるはし

麗 姝

同ト 但姝は面貌のうるはしき事  
 麗麗 流麗 ○麗き事業は文明を代表す  
 壯麗 靡麗 ○山野の麗きは春と秋

うながす

催 促 同ト

うゝなふ

失 亡 喪 共ト同ト

○のの部

○のの部

の

轉 母ののに用ゆ  
 簡 母のの也

のき

櫛 又櫛に作る  
 堂櫛 櫛櫛 櫛櫛

軒 車ののきなるも通して家屋ののきにも  
 用ゆ

のる

乘 騎 同ト

駕 のりかゝる意也たゞへは成駕といへば  
 しのぎ堅剛しのりたそふの意又のりも  
 のこいふ事にもなる

鳳駕 命駕 夙駕 ○人に駕るものは落  
 車駕 狂駕 多し

のむ

吞 大口にのむなり酒をのむ等にあらざ

並吞 虎吞 鯨吞 ○包吞にすれば齒を  
 痛まざ

啜吞 狼吞 平吞 ○大魚は小魚を呑む  
 酒をのみ水をのむ等也

漿飲 醇飲 ○暴りに酒を飲むは終  
 半飲 粗飲 能く樂を飲む

のど

喉 咽 吭 同ト

のち

後 后 同ト

のり

則 法規 憲 範

いづれも法令規則憲法等の如きにも用ゆ  
 のり也

度 程度といふ意味にて法則の意にはあらざ

踰度 刻度 ○度に割ふたる家作り  
 候度 ○度を見て矢を放つ

のみ

耳 兩一已 同ト

のぼる

上 登 同ト

躋 大躋 同ト

日躋 展躋  
 壽躋

昇

昇 昇 同ト 昇又陞に作る  
 升降及び日月ののぼる等但升は量數にも  
 成る

昇平 昇降 日昇  
昇進 雲昇

騰 上升の意皆兼ぬ

騰貴 勢騰 奔騰  
騰上 龍騰 非騰

のぶる 又のぶ

暢展 舒 大同小異

條暢 和暢 開暢 洞暢

披展 舒展 帆展

卷舒 安舒 望舒

伸 屈たるものをのぶる意

屈伸 道伸 ○詭毛を舒て足を伸す

陳列 敷陳 星陳

陳 のべつらぬる意又展舒と同ト

延 引きのほす意

延引 遷延 ○雨天ならば日延

演述 文筆及口舌にて意をのぶる事

演舌 口演 著述 贊述  
演劇 作述 引述

望 下より上をのぞむ日月をのぞみ君上をのぞみ又才徳をのぞむ

才望 德望 ○幽閑亭は漢に臨み白雲堂は山を望む

臨 上より下をのぞむの意

臨席 臨視 親臨  
臨場 臨川 君臨

のこす

遺 貽 同意にして貽は又贈の意にも成る也

のがる

遑遑 逃 同ト

竄 のがれゆるるの意又しりそけらるる事にも成る

竄匿 潜竄 逐竄 鼠竄  
竄逃 流竄 竄遁

○深山に竄れて跡を匿す  
○竄るゝに跡なし

罵詈 同ト

○おの部

○くの部

くに

邦州 國 同ト

但細列すれば國は邦内の區分をいふ

くま

隈曲 阿 同ト

くら

倉藏 同ト

庫 器物を容るゝくら

文庫 書庫 充府庫

武庫 管官庫

康 米穀を入るゝくら

帝康 豐康 米康

くび

首頭 頸 同ト

くし

串 かしし又さし貫くの意櫛は異なり

串珠 矢串 ○齒を法(は)の串に刺す

魚串 ○芭蕉にならぬ果は串にさす

くじ

籤 闕 同意にして闕は俗字と知るべし

くつ

沓靴 履 同ト

衆はたつにて尋常履の上にはくつ

赤馬 玉馬 烏馬 金馬 仙馬

くわ

機 杖 ともに牛馬を繫ぐなり今通ト

俗に書するもくわの義なし

くれ

果 晴 同ト

晚 同意にして又物の老末の意に用ゆる事

多し  
晩年 晩景 歳晚  
晩暮 晩作 衰晚

くつわ

鑿 鑿 同ト

銜 軍陣に馬の鼻を止るため口中にゆくま  
せるものにて鑿と異なり之を混して  
用ゆるも當らぬ

くばる

配

賦 賦部賦税等の如くなり

貢賦 財賦  
田賦

くら

暗 闇 同ト

くづる

崩

頽 頽 やぶれくづるといふ意にして又  
崩の勢合にも用ゆ

崖頽 傾頽 振頽

くびす

跟 蹠 蹠は足の裏面ふむ處をいふ

くるむ

苦 困

同ト 但困は苦に對して意切迫也  
困弊 困迷 貧困  
困厄 困却 心困

○やの部

矢 箭 同ト

やぶ

叢 叢 同ト

深叢 叢叢  
林叢 疎叢

やく

焚 燒

同トして山林をやき田宅をやく等に  
多く用ゆ ○始皇は書を焚き丹霞は佛を  
焚く

沙頽 雲頽 ○夢の中に腫瘳頽る  
崩壞 反壞 ○老ても姿は壞れぬ  
摧壞

くだく

碎

俗のめまといふことろにて碎に對して  
意つよからぬ

擊摧 風摧 破摧 ○窓の竹風雨に摧かる  
兩摧 心摧 ○一言の下に摧く

くつる

朽

學朽 衰朽 材朽  
老朽 殘朽

腐敗 臭腐 ○腐たる鱈より生たる鮓  
腐爛 乳腐 ○肉は腐ても骨は朽ちぬ

くだる

下 上の反語

降 思ひをくゞし志をくゞし歌をくゞす等  
なり

師降 受降 ○降るは昇るより苦し  
心降

炙

炙り やき也又肉類をやく等に用ゆ  
喉炙 膾炙  
煙炙 酒炙

焦

こがす又黒燒なり思ひをこがす等にも  
用ゆ 憂焦 心焦 ○糧の爲に身を焦く由  
土焦 ○人の面を焼く者は胸を焦く

やみ

暗 闇 同ト

やむ

止 斷然やむる意

禁止 廢止 ○太平にして干戈止む  
停止 ○酒を止て茶を樂しむ  
つくるの意なり

歌

消歌 凋歌 ○氣力歌て馬に騎る者は  
衰歌 馬に侮らる

休 已

息 いこひやむの意  
罷休 罷休  
乞休 乞休  
姑息 姑息  
柘息 柘息 止息

罷 休と同じく職業をやむる等に用ひ又

止の意にも通ず

罷職 志罷 ○罷られんより早く休めよ

舞罷 ○酒宴を罷じ

漸 稍 すこしといふ意

しほらくといふ意

やすー

安 安心 安泰 計安 偷安

易 易の反語安とは別つ也

簡易 輕易 ○安き業も易く思ふな

容易 ○水を呑むより易し

康 安と同じくしてたのしむの意をよむ

樂康 平康 降康

寧 安に康の意を兼ぬ

丁寧 道寧 ○液搖ぎして舟寧し

安寧 ○山の形は寧に寧し

備 雇 借 同ト

やする

瘦 癯 同ト

竹瘦 山瘦 病瘦

やぶる

破 破 同ト

敗 軍のやぶれたる又射盡のやぶれたる等也

成の意の反語を知るべし

やなぎ

揚 柳 同物なり別てをいへば枝の剛く

して短きは揚にして柔にして修

やはらか

柔 剛の反語

性柔 吉柔 骨柔

和柔 力柔 軟に作る同ト

柔に同じく且こまやちにしてやはらか

なる意

花軟 芳軟 輕軟 葡萄酒は軟にして

能く酔ふ

打毬 毬毬 ○鞠を蹴り毬を投げて蹴しむ

星毬 繡毬

まど

窓 牖 同ト 但窓の如きもの

閨 戸 牖

まつ

待 俟 又俟に作る同ト

まく

卷 卷舒 浪卷 序卷

又まき收るの意

また

捲 卷に同トくして

又

亦 亦はもと又と稱し何も亦といふ處に

用か

役

問の如し 復の意のかりきもの

還

やーをふ

羨 願 同ト

やゝもすれば

輒 動 但動はそのまゝといふ如き意

○まの部

ます

益 損益 附益

増 益に同トく又加ふるの意

増加 増員 ○政理もりて土地増

増減 ○兵を増して城を攻む

倍 加倍するより時にまかすの割合にま

やくに讀むことあり

まめ

豆 救 同トいふれも豆の越名

まり

鞠 録 同ト 但録は手まり也

丸 まどかにして角なきもの名

彈丸 樂丸  
弄丸

圓 まどかに割を  
方の反語

圓陣 方圓 圓圖  
圓月 輪圓 圓圖

まこと

誠信 實定 並向

諫 言語の實なること

直諫 諷諫

まをる

賢 疎 同ト

優 賢勝の意に對しては其意ひらし

優等 優勝 才優 學優  
優劣 品優

まだら

斑 馬の毛色のまだらなるよりいふ

彩段 霞段  
備段 斑段

まがる  
曲 道の反語

曲道 屈曲 新曲 ○心の曲りたるは形  
曲尺 灣曲 はれどして寄多し

勾 かまこも割を

勾配 管勾 ○町を曲れば勾りたる様

まどす

言

申 言のぶる意

白 明白のいふことろにて潔白いづはり無  
き意なり

白狀 敬白  
建白

まかす

任信 同ト

まもる

守 かくまもる又執り守りてうごかぬ意

まきに

護 衛 固守 城守 監守 縣守 郡守

護身 警護 防護  
護國 屏護  
武衛 防衛 禁衛 殿衛  
官衛 宿衛 政衛

まきに

將 かしめたりかくすれはかゝなるべきは  
つていふに用ゆ

正 かしめたりといふ意

雅 大意正に同ト

まきかり

鉄 鐵 斧 同ト

まろふと

客 賓 同ト

まーはる

交 善交 神交 ○萬國の交り

○けの部

けす

消 滅 同トして滅はきへつくるの意

滅國 剪滅 棋滅 登滅  
滅盡 興滅 磨滅

ける

蹴 けりまづくの意にして蹴の字には蹴らずし

けづる

削 削 同ト

鍍 土地をけり平らす等に用ゆ



ひな一

險阻 同下として阻は入をてもいふ意

重阻 深阻

ひがる

穢汚 同下

躓くよりあつちまひぬる意

○月は雲に躓びたる ○才子の名も多言に躓びたる

○ふの部

ふみ

文章書 同下

ふく

吹 風のふく事又口にてふくにも

噴 ふきいれす事

噴水 ○ポンプは水を噴く 噴火 ○煙を噴く山

ふね

舟 同しくふねにして差別なきお如くな

蒸氣船 帆前船 甲鐵船 鳥舟 輕舟 魚吞舟 小舟なり

艇

ふて

筆毫 同下

ふだ

札 標 簡 同下古へ欲無き時又を竹筒に書し又木札に書したるよりいふ

ふす

伏 身を屈し伏し又かくれひそむ事

伏兵 潜伏 畏伏 懼伏 伏汲 隱伏 屈伏 降伏

臥

坐臥 醉臥 平臥

俯

又俛に作る首をさげる事 俯仰 首俯 ○道理に伏して俯す 垂俯 進俯 ○俯して手を拱ぬく

ふる

経歴 同下

ふむ

踏踐 同下

履 同下意にして又踏こいふ意を持つ

履歷 福履 踐履

ふる一

古 故 同下

但故はふるき任來り又ふるくなりし意又とこいふ義に成るなり

舊

故事 典故 世故 故人 典故 亦故の意

舊例 舊故 新舊 舊慣 懷舊

ふくろ

囊袋 又帯に作る同下

ふくむ

合銜 同下

ふるふ

振 意氣をふるはし又うごめすの意

振氣 玉振

振衣 ○皇國の威振ふ うごめす意三寸の舌をふるひ首をふるふ事

掉

戰掉 渡掉 身體のふるふ事

顛

内顛 延顛 警顛

ふせぐ

防禦 同下

豫防 關防 邊防 ○火を防ぐには水 自防 拒防 ○敵を盡くすは身の防ぎ 外禦 覆禦

拒

拒絶 左拒 反拒 ○郷に懸まるれば母 拒抗 右拒 事も衆に拒ぶる

○この部

こけ

苔 蘇 毒 同ト

但蘇は樹木等に付て生るこけに用ゆる例多し

こぶ

瘡 癩 同ト

こと

琴 瑟

琴と瑟とは懸る絲の數にて區別あり但通例琴の字を用ゆるなり

日本にて筑紫に此字を用ふ又風琴といふは取の事なる

こゝ

輿

輿 小輿をいふ又輿をいふ則ち竹橋の名あり

こぶ

こぶ 俗のまぶしといふ意

こぶ 酒 寒 乞食 選 乞

請 願 の 意

請求 稟請 ○怠りて請わるとは續て請願 申請 こぶより苦し

この 又これ

此 是 斯 大意同ト

之 是に同ト又發語の詞にも成るなり

維 惟 これを制せ發語の詞に用ゆ

こゝろ

心

意志の在る處又工夫の出るところ

意志 意想 發意 素意 如意 意匠 適意 大意

こゝろ

剛 一人のこゝろに用ゆる事多し

剛勇 剛膽 氣剛 剛毅 堅剛

強 衆力のこゝろに用ゆる又一人のつよき

強國 強勢 強健 威強 力強 強情 強兵 執強

ことば

辭 詞 同ト

ことば

答 對 同ト

應 神速にことばも意山鳴谷應といふ如し

馴 じくゆるの意にて愚にことばを馴たふるの類

ことば

媚 嬌

但嬌は容貌にてことばの意

嬌態 阿嬌 花嬌 梓嬌 春嬌 嬌嬌

こゆる

超 踰 同ト

才藝のこへたる力のこへたる事也又超の意にも用ゆ

○總ての事平聲の人に超はされは慣なし

こぼつ

毀 壞 同ト

こゝろす

殺 誅

但誅は罪あるものをこゝろす也

殺戮 天誅 征誅 殺戮 筆誅 射誅

害 害に用ゆる

ことば

致 爰 焉 斯 大同小異

ことば

殊 異なるの意又特の意にも成る

殊勝 殊優 ○親に事ふる殊なり 殊恩 ○香り殊に美なり

特 ひこりといふ意にて他にかけわらぐ又衆に傑出するの意

特別 奇特 ○物價特にあがる 特典 絶特 ○才學特に秀ぶ

ことば

理 斷 同ト

こゝろへ

製 持 同ト

装 衣帯のこしらへ器物のこしらへをせりせ  
又いで立ちよの部にも出す  
男装 女装 ○金銀の装らへ目と装やす  
假装 ○輕便に装らへ

こゝろよ

快 愉 同ト

ことくく

迷 盡 成 同ト

こひねがふ

希 庶 幾 同ト

冀 助くるの意に甚つて君臣相望むの希  
望等より來る

○はの部

は

滿 繪 同ト

はり

襟 袴 同ト

はだ

枝

同ト 但條は長さたゞ又垂れたるはとなり  
長條 奇條 動條  
垂條 散條

支

分枝四支等の如くにて木の枝にはあらざ  
支出 ○支ある條○鹿角の支  
支離 ○川流支をなす

垂

垂れたるかたちにて枝を異なり  
雪采 垂采 ○一采の垂采  
双采 銀采 ○耳采に觸る

はる

彫

鏤 ほの部に出す

はらむ

撰

擇 採 大書同ト 但採は盡しくはらむ意に用ふ

はひす

夷

胡 戎 古へ外國をさすの稱此の他  
戎等みなはひすを割せり

はがく

描

摹 共寫したるの意を

暴形 臨暴 暴擬 俾暴

○白猫の貌音  
○虎を暴て狗に類す

○ての部

○あの部

あに

兄 昆 同ト

あわ

粟

未 動物の惣名なり

未 總 嘉禾 ○大風禾を害す  
未 實 麥禾

あー

蘆 葦

同ト 葦は蘆の小少なるもの  
但葦は又よしとも割す

あわ

沓 漚 同ト

沫

あわの小少のものより吹き出すあわ  
等に用ふ

あと

唾沫 噴沫

○急流沫を飛ばす  
○流汗沫を為す

跡

蹠 同ト 城跡足跡のとくたしかなるあこなり

痕

兩露のあこ涙のあこ等に用ふ  
淚痕 血痕 ○墨の痕乾かす  
爪痕 ○潮汐痕を留む

癢

多くは切疵のあこに用ふ又癢の意にも  
用ふ

後

創痕 疥癩 ○牙腫の痕存す  
垢痕 ○刀箭の痕

あな

人の後に付く後より進むの意にて物體の  
痕跡にはあらざ

孔

透門の穴たこへは鼻のあな耳のあな  
等なり

坑

氣孔 七孔 ○笛のあな  
眼孔 ○樹木の節孔

あり

金銀を採るあな兵を坑にをこしいると  
の類

有 無の反語  
たしかにあるの詞

在 在官 存在  
在宅 現在  
○海外に在り  
○咫尺の中に在り

あめ 鉛 錫 同ト

あし 足

脚 同意なるも小差あり則ち日の脚卓の脚  
等の如きなり  
○雨晴れ山脚を露はす  
○送らしき脚本

あふ 逢

約束なく自然にめぐり逢  
○華水自ら相逢ふ  
○夢中に逢ふ

あは 遇

むかへてあふの意なり又逢遇の同意に  
も成る事あり又あしらむの事にも用ゆ  
○家傳の膏を樂  
○一粒の粟氏の膏より生を

油膏

但膏は濃厚なるあふら

あたぬ

直 道と同一きも物の品位を代表し且つ俗  
にいふ相違の意なり  
定價 市價 ○瓦玉價を同トナす  
齊價 尋價 ○動じるは價を増加すの基ひ

あたる

當 齊 同ト  
突の刺にあたるの類にして思ふたる如  
くはづれざるの意なり  
○思慮昏中る

あがる

上 事のおびる意又はたらしきの意を持つ  
舉止 驚舉 輕舉 ○事業舉る  
舉動 推舉 冲舉 ○人物能く舉る  
揚 形氣のおびる事又飛びあがる

あだ

仇 讐 怨 但怨は恨の意を持つ

あゝ

嗚 呼 嗟 嘆 歎息の詞にして  
音同ト

あした

朝 旦 同ト

あさひ

旭 暎 同ト

あつき

暑 時候のあつき  
熱 火氣のあつき又時候のあつき事にも  
用ゆ

あか

赤 あかき色  
朱 朱に成る唇朱の如し等  
丹 あかき色場合にによりて用ゆ

あぶら

抑揚 稱揚 姓名揚  
發揚 意氣揚々

あつ

厚 敦 行状心術のあつきなり

篤行 篤志 ○親に篤き者は衆に薄からず  
篤實 ○意を注ぐ篤し  
篤敬 風教安敦

あわす

併 ならびあふの意又あつまりあふ事  
合併 ○吉凶併せて来る  
合併 ○弱は強に併せらる

あし

凶 吉の反語

惡 善の反語にして事の上につけていふ

惡事 惡意 ○天下の惡皆作す  
惡行 ○風味惡し

醜 惡の意に近し美の反語

靚麗 好靚 ○靚状を露はす  
妍麗 群麗 ○地麗く麗みのらぎ

あれる

荒 宅のあれること又志操のみたれたるにも

暴 暴動のめしき又無道なる意又風雨のめ

らぎ等

暴行 凶暴 ○米開の俗は都て暴し

暴飲 凌暴 ○海暴れて魚市に上らぎ

事多し

蕪 田圃のあれる事又荒の字にも意通ぎる

あいだ

間 際

同ト 但間は彼是のあひなり

際限

文際 定際 ○兄弟の際  
庭際 天際 ○杯盞の際

あらふ

洗濯 同ト

あかつき

曉 展 同ト

但展はめした又こまこまの意あり

あたゝか

暖 温の義にも亦通ぎ

温 水の温かなる旨のあたゝかなる事又あ

あきらか

明瞭 同ト

あらわる

顯現 同ト

露 あらはれ見ゆるの意背をあらわし

あまね

普周 徧 同ト

あつまる

集聚 同ト

あままり

誤謬 同ト

訛 欺きいつはるの意を持つ過謬の意に

宛 さながらといふの意

恰 適當の意俗のてうといふ意恰も可恰も

其處を得たるの如し

○さの部

さと

里

郷 里に同サも己が産地の事をいふに用

同郷 家郷 ○錦を被て郷に歸る

同郷 寄す ○書を郷に寄す

さす

指 指し示すの意なり

指南 指名 ○暗夜の航海は針の指に

指彈 指定 任す者多し

刺 刺撃 ○力を極めて刺す

刺客

さほ

竿 魚を釣る竿又其他にも

あらたむ

改更 革 大同小異

俊 あらため止るの意過をあらため非をあ

あづかる

預參 與 管 干 大意同ト

關 せざるの意にして意味ゆるし心に關ち

らす名譽に關ゆるを嫌ふの如し

あわれむ

憐 憫 同ト

哀 あはれみかなしむの意

哀訴 悲哀 ○洞簫を聞て哀を増す

あなごる

侮 輕 同ト

愛 みせりに愛るの意淑麗面愛の如し

あたかも

釣竿

○百尺の竿頭一歩を運び

棹

共に船をこたすなり又棹はかひ

篙

同トく船のさほなるもさすきほなり

さび

鏽

同ト

さく

割

牛を割き雞を割く等に用ゆ

割

○地を割て掘る

裂

衣服をさく又破裂等の如くやぶるこの

分裂

○肝胆將に裂んとす

さる

振

同ト

振

又振に作る

さね

實

同ト

草木の子をいふ

發

又同ト 但稱に用ゆ多く見ることなし

さむる

覺

夢のさむる迷のさむる等

寤

酒のさむる又夢眠のさむるにも

醒

酒醒 獨醒

酒醒 獨醒

○醒て極多し

○醉て歌ひ醒て痛く

さどる

悟

了 同ト

覺

さむるの意の如く迷をさむり前非を悔

さく

捧

同ト

さらす

曬

又洒に作る 曝 同ト

さゆる

泣

寒氣の爲に流動物の凝固するをいふ

朗

朗ははひらかし又朗は又輝の清き等に用ゆ

月朗

○鶴の聲清亮

さぐる

探

忍びきたる意問難のたかひをいふ

偵

さわぐ

噪

鳥の集りまわより来る

鳥噪

群噪

○千眠蟬の聲かに覺む

亂噪

○兒童の遊戯聲かし

騷

靜穩ならざるの意

騷動

風騷

○寂として騷しからば

さめひ

境

界

同じくして又現在の場をさし又所宅の

世界

眼界

苦界

欲界

さゐはひ

幸

禎

國家に靈瑞ありし時等のさゐは

祥瑞

百祥

○兎を擧ぐるの祥

祥瑞

吉祥

○天より祥を下す

さむらふ

侍

君父及長者の側に從近するの詞

士

さむらひの詞を又男子の美稱に用ゆ

さかづき

盃

同ト

さゐづる

響

同ト

さゐゆる

支

同ト

柱

但柱は防ぎまゝゆるさといふ意味あり

さだまる

定

同ト

禁制 制法 ○簡易なる國制  
規制 制度 ○制約を履行す  
断 断 断定 ○正邪断まる  
判断 决断

盛 熾 同ト  
壯 壯健 少壯  
壯年 丁壯

昌 運命及名聲のさかんなる事  
昌平 繁昌 ○運の昌なるを欣ぶ  
昌代 運昌 ○家聲永く昌なり

拭 貴きを拭く長をさしはらひるいふの意  
拭 拭く 拭く  
拭 拭く 拭く  
拭 拭く 拭く  
拭 拭く 拭く  
拭 拭く 拭く

汗 汗 同ト

聞 自らきくにて則ち聞こへるこいふ意  
味なり

見聞 新聞 聲聞  
博聞 博聞 多聞

聽 求てきくの意  
靜聽 堪聽 ○志を述る主義を變せず  
謹聽 政聽 唯衆の聽くに任す  
可 許可 裁可 ○請ふ處悉く可かる  
認可 皆可 ○裁が言可かる

切 伐 裁 同ト  
裁は又たつとも

剪 燈をきり紙をきり絹をきる等又伐の意  
にも用む  
兩剪 ○剪平紙を剪る  
剪剪 ○園樹剪を剪る  
断 さつぱりきり裁ち跡を減するの意

膳 肝 同ト

膏 肉のきれなり

○木の部

樹 木 木の樹この用法は區別なし雖も其一  
二例を示す  
玉樹 松樹 引泉樹  
茂樹 梅樹 森樹 鬱蒼

桐 梧 同ト  
但梧は俗に碧梧と稱す支幹青色也

帛 衣 同ト  
贈物にするきぬに用む通例は多く  
布帛 帛帛

被 著 同ト  
着はつけるこいふ意にも用む

疵 身體のきつ又其他にも

瑕 玉のきつ又器物のきつ  
掩瑕 瑜瑕 ○言行瑕なし

醜 醜 同ト  
但醜は作用の上に主としていふ  
慘醜 變醜 ○緩格にして醜しからず  
奇醜 殘醜 ○蹇氣殊に醜し

彫 刻 同ト

消 滅 共にけの部に出す

○ゆの部

弓 弧 木の弓又ゆみを張りたる形をいふ

響 響 應 響

ゆく 行 歩行なり

同行 夜行 ○百里の行も一歩より始まる  
舟行 越行 ○行に徑よりせざ  
いたるといふ意又行の同

之 之 京 所之 ○一筆のきくところ任す  
送 送

往 往 同ト

但往はゆき去りたる事又往來の意にも  
用ゆ又往は長途及び夜にゆく等也  
往來 長征 遠征 月夜往事  
往昔 尚往

徂 又往の意徂と署來るといふ意なり

ゆか 床 牀 同字

ゆたか 豊 年のゆたかなる又才徳内華のゆたかなるにも用ゆ

めす 目 眼 同ト

めす 召 喚の意なり

召 應召 應召 ○一日三たび召する  
周召 ○晝夜の宴に召する  
兵をゆし租をゆすの意の如し  
又職に就くるが爲にゆすの類

徴 徴集 徴收  
徴發 徴發  
又徴の意

辟 微辟 辟辟  
辟 辟

めぐむ 惠 恩 同ト

愷の意をめぐめて見る優渥者を愷む等  
に適當す  
愷 愷  
○同胞の愷みを受く  
○忠臣の愷を愷む

めぐる 回 運 旋 周 大同小異

年豐 滋豐 ○物豐かなるも救無き時は  
財豐 凶豐 貧しき如し

鏡 多き事又にぎめよ

雷鏡 肥鏡 ○衣食足て人鏡かなり

沃鏡 ○波靜にして四海鏡か

寛 廣き意豐鏡の意を別つ

氣宇寛 ○寛かにして衆を容る

政事寛 ○寛かに出來たる會堂

辟 心體のゆたかなる事

心辟 體辟

ゆづる 謙 遜 同ト

ゆるす 赦 免 同ト

許 可の意まかすの意赦免と異なり

許諾 允許 ○衆の許したる事には非難なし

許可 特許 ○屢々請て許されず

○めの部

繞 ままひめぐたる事にして運轉の意はなし

夢繞 齊繞 ○水繞つて路遠し  
山繞 ○松竹軒を繞たる

○みの部

み 身 躬 軀 同ト

實 草木のみなり果實秋實の如し  
子 又實の意歸に用ゆ

みち 道

道に同トくして又法といふ意味になる  
事多し

治路 取路 ○糊口の路を求む  
世路 ○言を建るに路なし

みね 峯

峯 峯 同ト  
平遠なるみねをいふ



みさ 皆成 同ト

みる

見 看 觀

大意同ト

但觀は俗の見物等に用ゆる也

觀 花遊觀

○演劇を觀る

觀 月壯觀

○拱を觀るを止めて書を看る

氣を付けて見る所謂監督の意

○萬人目を剛て視る

○非禮の視を受け

みせ

店 塵 同ト

みがく

礎

研 同意にして又修練の意にも用ゆ

研究 精研

○心を研て技術進む

力研

みどり

綠 碧 翠 大同小異

みつる

満 充 實 同ト

盈 滿の極なり

滿 盈 滿盈

豐 盈

○月盈つれば虧く

○斜に盈ちて進む

みだる

亂 濫 紊 同ト

妄 振 同ト

失體無禮の意

妄言 虛妄

鄙振 食糧

凡振

○妄りに酒を働む

○稔りに田園を荒らす

授

わづらわしく事多き意

又亂の意にも

授 紛授

○滿盈を警めされは内か

みことのみ

教 詔 同ト

○この部

品 料

但料は區分のしななり

甲料 殊料

○實を受くる料あり

乙料

○力の料各異なり

敷

鋪 同ト

布

布今布告といふ如く又名華布開のし

布教 宣布

○國威を海外に布く

布建 建布

○流布をいふ

島

嶼 同ト

但嶼は小島し

柴

柴草又木の小さなもの

或は薪の事をいふ

○柴を折りて焚く

芝

芝草なり俗に柴の意と同一用ゆるも

其義なし

一ち

敷 同ト

一る

知

知覺の意なり又處として智慮の義にも

用ふ 知友 閉知

○氷を見て寒きを知る

知人 承知

○彼を知り己を知る

博識 遠識

○千里の外を識る

智識 墨識

○淵中の魚を識る

一づか

靜 閑 同ト

一けい

茂 繁 華 同ト

一桐

茂繁と同じきも稠密といふは意を

してたとしけきをいふ

一ぼむ

一 勢 同ト

一 勢 同ト

但勢は勢力のしほむにも用ゆる事多し

勢 勢 勢 同ト

一る 一 又しるす

一 印 驗 同ト

記 しまりの意にして記録日記等の如し  
記事 登記 ○美事記すべし  
記應 暗記  
微 證據標準のこまかくて印記と異なり  
散 散 〇名將好陣の事跡以て散  
散古 〇すべし

いとね  
釋 齒 同ト

いろー  
白

皓 皓事後に於て素  
皎に作る同ト  
皓 皓の白き光の白き等と  
鮮皓 満頭皓  
清皓 月出皓 ○潔めざる皓は皓し

いかり  
然 その色をりいふ意  
爾 そよしていふ意  
いたがふ

間 すま又開暇無事の意

隙 物のかけたる處又穴のあるひまにて無  
事にしてひまなるを異なり

穴隙 ○白駒隙を過く  
窓隙 ○窓は隙より生ず

ひぢ  
臂 肘 同ト

ひげ  
鬚 鬚 同ト

ひく  
引 挽 同ト挽又戰に作る

曳 裳をひく杖をひく等に多く用ゆ  
或同トくして跡をひく如きの意に  
用ゆ

惹 〇恨を惹て忘れず

煙惹 ○一帶の青松翠を惹て長し

ひねる

捻 拈 同ト

ひろふ

隨 從 同ト  
但從は附くの意なり  
順 あらそはぬ意柳の風に順ふが如し

柔順 恭順 ○賢者の意見に順ふ  
温順 ○門り順ふ人は今の世にも  
絶へず

いりぞく  
退 退の反語

退去 辭退 ○母を擧ぐれば意自ら退く  
退廳 晚退 ○固く執て退かす

却 斥 同ト  
しりそけるいふ意

却下 返却  
抛却

いばく  
屢 數 同ト

〇えの部

〇ひの部

ひま

拾 摺 據 同ト

ひらく

披 卷をひらき傘をひらく等又開にも  
通ぐ

啓 啓蒙 啓事 ○疑團を啓く  
啓後

發 發明の意開啓の意を并せ持つ  
開發 明發 ○千古の惑を發く  
積發 ○漸に國を發き教を布く

ひさく

庇 廂と同くして覆ひたすくるの意あり  
徳庇庇蔭等の如し

ひたひ

願 願 同ト

ひろく

廣 弘 同ト

寬 量大にして又かたが成る意の部に  
就て見るべし

潤 漢として廣き意

天潤 闊潤 ○海潤くして山を見す  
壯潤 ○行ひ驚く才意潤し

博 博學 該博  
博聞 詳博

ひく

低 高の反語

下 低の字の所に用ゆる事多きも全體卑き  
意をもたせて見るべし

下等 人物下  
下位 門地下

ひたす

浸 涵 同ト

ひと

均 等 大意同ト

齊 ひとのひたる意にて見る際して均等  
の意同ト

ひと

單 單一の義にして純なる意

幹

本原 本統 ○本を抜き末を枯らす  
○金錢は生活の本

水のみきを云ふ

廉幹 ○枝は吹吹かれても幹を亂さず  
修幹 ○幹堅ければ末強し

もる

漏 泄 洩 同ト

も

臆 靜 同ト

も

如 若 同ト

もとむ

求

要 かならずもとむるの意にて用ゆ

必要 招要 ○早田にも水を要し  
固要 ○酒を求むるは米を要する  
お如きにあらず

需 又要の意

需用 軍需 ○時好の需に應ふ  
邊需

單純 ○單の衣服  
單騎 ○恩澤單に及ぶ

編 周編の意なり又單の意同ト

ひつぎ

柁 檣 同ト

ひろか

竊 かくすの意

密 同意にして又こまやか成る意  
又しけき意

密 密 詳密 ○密かなる事も一人に洩ら  
秘密 秘密 せば千萬人に語るに同ト

ひろかへる

蠶 細 同ト

○もの部

もと

元 原 素

大同小異いづれもはトまり又  
素は生と云ふ意味原はもと  
くの意とあり

索 さらりもとむる也

探索 ○月を踏んで花を索む  
捜索 ○好て難字を索むるは愚かなる  
生徒なり

もちゆ

用 庸 同ト

須 必用の意又水の意をよくむ

百須 世所須 ○金を懸て須  
要須

もすろ

裾 裳 同ト

裔 衣の末にて裾と同く用るも單に衣の義に  
して人類の子孫を後裔といふ又邊隅をも  
裔といふ

苗裔 四裔 荒裔  
貴裔 海裔

○辭氣を察して貴族の裔なる事を知る  
○樺太島は假北裔と稱す

もつとも

尤 極まり盡せるの意

尤物 殊尤 ○茶と生絲は國産の  
純尤 尤もなるもの

最 尤の尚ほ切なる意  
最上 ○味ひ最も可なり  
最良 ○美人の字を織るは最善也

もてあうぶ

説 又玩に作る同し  
器物をもてあそぶ事

弄 俗のなぶるこいふ意  
賢説 賞説 ○彼の小児は西行の黏を歌ふ

弄 俗のなぶるこいふ意

弄弄 戲弄 ○様は樵夫を弄ぶ  
押弄 ○寒梅は蝶の弄にならば

○せの部

瀬 瀬 同ト

せみ 蟬 蟬 同ト

せむる 貴 但蟬は蟬の大なるもの俗に大

誅 急迫にせむる意多く用ゐたることを見ぞ  
せまる

迫 迫 同ト  
危迫 畏迫 ○白刃の心に逼るを畏れぞ

窘 せまりくるしむるの意  
窮窘 寒窘 ○故障終夜窘まる

窘 勢窘 惶窘 ○窘られて逃るゝに路なし

せしむ

令 命令の詞

使 命令又使役するの意

○すの部

粟 馬のすなり

窠 馬の巢にすきらば又人の居宅にも  
用ひし事あり

蜂窠 煎茶窠

透 隙 同ト  
但隙はすき間の意なりひの部にあり

招 摩 同ト  
但摩はすれぬの意もあり

手摩 肩摩 ○古剣を摩りて銘を讀む  
研摩 撫摩 ○手を摩りて懐ゆるより

悔なきに如かば

澄 清 同ト

澄の意はなし事の成就したるに用ゆるの  
部に出す尤も俗語と知るべし

鋤 鋤 同ト

筋 條 條目 科條 ○漣の糸數條にゆる

條 條目 科條 ○無筆は町條の多きに苦しむ

すみ 墨 書畫をかくすみ  
炭 燒き物に用ゆるすみ  
すむ 居住なり  
棲 又栖に作る同ト  
馬の巢にすむ又人類隱遁のすみ家等をいふ  
馬棲 山棲 ○鳥は水を擇て棲む  
禪棲 ○紅塵の中却て隱者の棲あり  
す、 煤 焔 同ト  
す、 鈴 木の柄のある鈴にて古へは兵を徴し今を  
布くに鐸をならして知らしむる事あり  
束鐸 梵鐸 ○新聞糸は文明の木鐸  
す、 過 軼 同ト  
但軼は行き過ぐるの意

すき 透 隙 同ト  
すき 招 摩 同ト  
すき 手摩 肩摩 ○古剣を摩りて銘を讀む  
研摩 撫摩 ○手を摩りて懐ゆるより  
悔なきに如かば  
すむ 澄 清 同ト  
すき 鋤 鋤 同ト  
すむ 筋 條 條目 科條 ○漣の糸數條にゆる  
條 條目 科條 ○無筆は町條の多きに苦しむ

すゑ

季末

氣節のすゑより来る又末子を季の子  
といふ

時季 叔季  
歳季 昆季

すがた

姿

物のかたちを代表するの意に用ゆ  
又容と同一く見る事も多し

容

○善き姿を見て惡き姿を省みよ  
なりかの容を見るべし

すすむ

進

漸

そろ／＼とすすむ又順序によりてす  
むの意なり

漸々

○教化年にな  
漸々 沾漸

勸

○孩児の智の漸は無心なり  
學をすすめ酒をすすむる等に用ゆ

勸進 勸告  
○事業を勸むる者を惡くむ  
勸められて初て味を知る

總

惣又同ト  
凡の意に郡の意に寄致ゆ

總裁 總務 百事總  
總計 總理 内外總

すくな

少

寡 鮮 大意同ト

すみやか

速

迅 疾 同ト

すまわち

則

乃 同ト

即

そのまゝといふ意を改めていふ時に  
も用ゆ

便

剛と即との両意を持つ

獎

勸の意にして又はけまし且褒美の意も  
あり

推獎 ○黄金で獎るは一樣の手段  
恩獎 ○獎めだして進むは名將の旗下

すだれ

簾 箔 同ト

すくふ

救 極 大意同ト

すつる

棄 捨 弄 捐 同ト

廢 止るの意又自らすてらるゝ意にも用ゆ

廢絶 存廢 ○廢られて實きは大師の錢

廢止 注廢 ○廢れたる觸體に野菊咲く

すでに

既 盡くるの意過ぎ去りたる意

已 去るの意

すべて

凡 廣くいふ詞にてくるめていふおかし

作文隨錄

明治二十一年十二月十日印刷  
明治二十一年十二月十五日出版



編纂者

岡山縣士族

本城新

備前國岡山區東中山下百五十六番邸

岡山縣士族

新谷英太郎

美作國勝北郡土田川町七十番邸

岡山縣平民

橋本紋三郎

備前國岡山區上之町百三十番邸

岡山區西大寺町

武内彌三郎

岡山照文堂津山堺町支店

仁科久造

賣捌所

全

發行兼印刷者

全

